

シャナン・ドハーティの寧丸蹴り
Kicked by a Celebrity by Bird



私は「ビバリーヒルズ青春白書」の大ファンである。なかでもシャナン・ドハーティに狂おしい愛を抱いている。

ある日、私はカルフォルニアに出掛けた。幸運にもそこはロサンゼルス。シャナン・ドハーティによく会えるというスポットだった。彼女は黒いサングラスをかけ、髪形も変えていた。とても上手に変装していた。誰も彼女が今をときめくテレビ・スターであることに気づかなかっただろう。

変装にもかわかわらず、彼女はとてもゴージャスだった。かわいらしい臍を丸出しにしたTシャツ。タイトなジーンズに黒いブーツ。周囲には誰もいない。私は彼女に歩みより、声をかけた。

「あなた、シャナン・ドハーティさんですね！」

彼女は小声で言った。

「黙って。今日は独りで買い物をしたいの。馬鹿なファンに囲まれたくないのよ」

彼女は歩み去ろうとした。だが私は彼女の後をつけた。ついに会えたのだ。こんな機会は一生ないだろう！ 私はふたたび彼女に近づいた。今度はかなり怒っていた。

「つけるのはやめて！ 警官を呼んでほしいの？ わかった？ この醜男」

私は言った。

「でも、シャナンさん、私はあなたの大ファンなんです」

彼女は歩み去ろうとした。私は彼女の肩に手をかけた。彼女は怒った。くるりと向きをかえ、力まかせに私の股間を蹴り上げた。こんなに強く蹴られたのは始めてだった。あまりの激痛に、全身が麻痺したようだった。私はゆっくりと地面にくずおれた。

彼女は、苦痛のあまり顔面が歪み、のたうちまわる私を見下ろして……微笑んでいた。勝ち誇った微笑みだった。彼女の目はこう言っていた。「あんたみたいなファンは迷惑なだけなんだよ」と。

彼女は無言で歩み去った。これまで味わったことのない激痛に股間を苛まれながら、私は彼女のゴージャスな後ろ姿を目で追った。

やがて彼女は人込みのなかに消えた。

彼女の強烈な蹴りは、私の睾丸だけではなくペニスにもダメージを与えた。それから二週間、私のペニスは勃起しなかった。入浴中など、要するに裸でいるとき、私は容赦なくシャナン・ドハーティによって去勢されてしまった事実を見せつけられた。この二週間の間、私のペニスはまるで子供のそのように縮こまっていたのだ。

やがてペニスの機能が回復した。私はシャナン・ドハーティのテレビをみながらマスターベーションをする。そう、私は、私の男性としての機能を破壊した美女を見ながら、マスターベーションをするのである。